一匹の馬

原民喜

五年前のことである

私は八月六日と七日の二日、土の上に横たわり空をながめながら寝た、六日は河の堤のクボ地で、七日は東照宮の石垣の横で――、はじめの晩は、とにかく疲れないようにとおもって絶対安静の気持でいた、夜あけになると冷え冷えして空が明るくなってくるのに、かすかなのぞみがあるような気もした、しかし二日目の晩は、土の上にじかに横たわっているとさすがにもう足腰が痛くてやりきれなかった。いつまでこのような状態がつづくのかわからないだけに憂ウツであった、だが周囲の悲惨な人々にくらべると、私はまだ幸福な

方かもしれなかった、私はほとんど傷も受けなかったし、ピンと立って歩くことができたのだ

八日の朝があけると私は東練兵場を横切って広島駅をめざして歩いて行った、朝日がキラキラ輝いていた、見渡すかぎり、何とも異様ながめであった

駅の地点にたどりつくと、焼けた建物の脇で、水兵の一隊がシャベルを振り回して、破片のとりかたずけをしていた、非常に敏ショウで発ラツたる動作なのだ、ザザザザと破片をすくう音が私の耳にのこった、そこから少し離れた路上にテーブルが一つぽつんと置いてある、それが広島駅の事務所らしかった、私はその受

付に行って汽車がいま開通しているものかどうか尋ねてみた

それから私は東照宮の方へ引かえしたのだが、ふと練兵場の柳の木のあたりに、一匹の馬がぼんやりたたずんでいる姿が目にうつった、これはクラもなにもしていない裸馬だった、見たところ、馬は別に負傷もしていないようだが、実にショウ然として首を低く下にさげている、何ごとかを驚き嘆いているような不思議な姿なのだ

私は東照宮の境内に引かえすと石垣の横の日陰に横臥していた、昼ごろ罹災証明がもらえることになった

ので、私はまた焼津の方へ向う道路を歩いて行った、
道ばたの焼残った樹木の幹を背に、東警察署の巡査が
一人、小さな机をかまえていた

羅災証明がもらえて戻ってくると今度はまもなく三
原市から救援のトラックがやって来た

私は大きなニギリ飯を二つてのひらに受けとって、
石垣の日陰にもどった、ひもじかったので何気なく私
は食べはじめた、しかしふとお前はいまここで平気で
飯を食べておられるのか、という意識がなぜか切なく
私の頭の片隅にひらめいた、と、それがいけなかった、
たちまち私は「オウト」を感じてノドの奥がぎくりと

揺らいできた

底本：「日本の原爆文学1」ほるぷ出版
1983（昭和58）年8月1日初版第一刷発行
入力：ジェラスガイ
校正：大野晋
2002年7月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。